

ファシズムとプレッツォリーニ

著者	小林 勝
雑誌名	研究紀要
巻	40
ページ	99-119
発行年	2017-02-25
出版者	東京音楽大学
ISSN	0286-1518
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001129/

ファシズムとプレッツォリーニ

小林 勝

(はじめに)

1950年4月18日、コロンビア大学の定年退職を目前に控えたプレッツォリーニは、最後の教授会に出席したときの気持ちを次のように日記に記している¹。

「私は彼らの顔を知っているし、ときには彼らの名前を覚えている。しかし、(ディーノを除くと)ほとんど彼らの誰とも心から話したことはなかった。……それは一部には私の性格によるものであったし、幾分は英語で話すことへの私のためらいのせいもあったが、結局は私がファシストであるという非難によるものであった。それは誰の口からも発せられはしないが、私には彼らの目の中にそれを読み取ることができるように思われる。だが、表立ってそれに反論することはできない」

アメリカに亡命した歴史家サルヴェーミニによって、プレッツォリーニはファシズムの手先であるというキャンペーンが展開されたこともあって、そういう評判が広く流布していたのである。1935年にアメリカに渡り、プレッツォリーニの世話で彼が館長を務めるコロンビア大学のイタリア会館にも滞在した作家アルベルト・モラヴィアは、インタヴュー形式の回想の中で、次のようにプレッツォリーニを評している²。

「彼はファシストだったが、ファシストになったことで、内心は苦しんでいた。実際には彼は、『ファシズムはまあ見るとおりのものだ。しかし、イタリアにとっては最良のものなのだ』というようなことを言っていた」

モラヴィアのこのような評価は、彼の勝手な思い込みによるもので、知識人として精神の自由を何よりも重んじたプレッツォリーニがファシストになったとはとても思えないが、ファシズムに対するプレッツォリーニの態度には曖昧さがつきまとう。ローマ・ラ・サピエンツァ大学のエミリオ・ジェンティーレは、プレッツォリーニが初期の批判的な態度から、次第にあきらめによる容認、ついには同意へと変わっていったことを認めながらも、ファシズム体制に奉

1 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1942-1968*, Rusconi (Milano), 1980, pp.144-145.

2 アルベルト・モラヴィア / アラン・エルカン 大久保昭男訳 『モラヴィア自伝』 河出書房新社 (東京) 1992年、109頁。

仕する手先ではなかったこと、イタリア会館の館長の職務を有効に果たすためにファシズム体制の官僚機構と関係を保ちながらイタリア会館の独立を保ちつつ、アメリカにおけるイタリア文化の普及に努めたことを指摘している³。ファシズム体制下のイタリアでは自分には自由な活動の余地がないことを自覚したプレッツォリーニは1925年にはパリに、1930年にはニューヨークに移り住み、ファシズム期のほとんどを外国に暮らしたが、第二次大戦前は夏期休暇をイタリアで過ごすことが多く、雑誌《ラ・ヴォーチェ》の時代に遡るムッソリーニとの関係を完全に断つことはなかった。また、ジェンティーレも指摘しているように、コロンビア大学教授兼イタリア会館館長という彼の公的な立場はイタリアとの友好関係を必要とし、そのことがファシズムに妥協したと見られるような態度を彼に取らせていたのかもしれない。

このように常に曖昧さのつきまとうファシズムとプレッツォリーニの関係を、彼の日記や自伝的エッセー、ファシズムに関する著作などから検証してみたい。第1章では彼がファシズム期をどう生きたか、第2章ではムッソリーニとの関係、第3章では彼のファシズムに関する二つの著書の分析を中心に論を進めていきたい。

第1章 ファシズム期のプレッツォリーニ

1922年10月31日、ムッソリーニ内閣が成立する。これ以後、第二次大戦末期の1945年4月28日のムッソリーニ処刑までの二十数年間をファシズム期と呼ぶことにする。プレッツォリーニは、1922年12月26日の日記で、ファシズムの支配が一世代（25年間）に及び、国民的惨禍による以外それから解放されるすべがないことを予測している⁴。この彼の予測はほぼ的中したことになる。ファシズム期は彼の四十歳から六十三歳まで続いたことになる。その大半を彼は外国で過ごしたが、四つの時期に分けて、プレッツォリーニの活動を見ていくことにしよう⁵。第一はファシズム政権の成立からユネスコの前身にあたる、国際連盟傘下の国際知的協力機関 L'Institut international de Coopération Intellectuelle の幹部職員としてパリに赴任する1925年までの比較的短い時期、第二は正式にニューヨークのコロンビア大学教授と同大学付属のイタリア会館 La Casa Italiana 館長に就任する1930年まで、第三が最も長期になるが、1940年6月のイタリアの英仏への宣戦を経てイタリア会館の館長を辞任する同年11月まで、第四が1945年4月のファシズム体制崩壊までである。

3 Emilio Gentile, *Profilo critico di un uomo moderno : Giuseppe Prezzolini nella cultura italiana del Novecento*, in 《Silvia Betocchi (a curadi), *Giuseppe Prezzolini : The American years 1929-1962*》, Vanni (New York) & Gabinetto G.P. Vieusseux (Firenze), 1994, p.19.

4 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1942*, Rusconi (Milano), 1978, p.364.

5 第一次大戦から復員して、1925年にパリに移住するまでのプレッツォリーニの活動については、拙稿「ローマ時代のプレッツォリーニ (1919-1925)」、『社会科学討究』第103号 1990年。アメリカにおけるプレッツォリーニについては、拙稿「プレッツォリーニのアメリカにおける教師体験」、『語研フォーラム』第14号 2001年。

(1)

第一次大戦が終結して間のない1919年5月、プレッツォリーニはローマ中心部に出版社ラ・ヴォーチェ書店を発足させた。戦前に雑誌《ラ・ヴォーチェ》を刊行し、パピーニら古くからの友人たちの多くが住むフィレンツェではなくローマを活動の場を選んだのは、過去と決別して無から出発したいという気持ちによるとともに、大戦後イタリアがかかえる諸問題を扱う場として混沌としたローマがふさわしいと考えたためである。

しかし、出版社の滑り出しは困難な状況にも災いされ、順調とは言えなかった。そんな中であって、アメリカの海外情報サービス The Foreign Press Service という団体の代理人にならないかという誘いが、1919年8月、彼にもたらされた。この団体はヨーロッパにおけるアメリカの紹介を目的にアメリカの実業家たちによって設立されたもので、その仕事はアメリカから送られてくる資料をもとに特派員報告という形でアメリカ紹介の記事をイタリアの新聞に売り込むことであった。プレッツォリーニは、ラ・ヴォーチェ書店がうまくいかなかった場合の救命胴衣の役割を期待してこの仕事に取り組むことにしたことを、1920年5月27日の日記に記している⁶。事実、この年の9月には彼はラ・ヴォーチェ書店の経営から手を引くことになる。その一方で、海外情報サービスの代理店の仕事は順調で、当初の特派員報告の作成とイタリアでの売り込みから、イタリアの文学作品を外国に売り込む独立した文学エージェンシーへと業務の幅を広げていった。これと並行してプレッツォリーニは内外の新聞や雑誌に健筆をふるい、1922年2月1日の日記では、フリー・ランスという英語を用いてイタリアでは珍しいタイプのジャーナリストであると自負している⁷。こうした活動の結果、イタリアを代表する知識人としてその存在を外国でも知られるようになり、この年の夏にはフランスでアンドレ・ジードらが参加して開かれたヨーロッパの諸問題を討議する国際会議に招待されている。

プレッツォリーニの活動が軌道に乗り始めたその最中に、ファシズムによるローマ進軍と政権奪取が起こったのである。先に見たように、彼はファシズム体制が長く続くことを早くから予測していた。それだけに彼の絶望は大きかった。言論の自由が失われた社会では、知識人として活動する余地は彼にはなかった。1908年の《ラ・ヴォーチェ》創刊以後、言論活動を通してイタリアとイタリア人を変えることを目指してきたわけであるが、イタリアのために彼にできることはもう何もなかった。1924年1月の日記の中で、自分たちのことをイタリアでは行動しないこと、周辺にとどまることを定められた人間と規定している⁸。それでも、ファシズム体制の成立を機にプレッツォリーニが完全に社会から身を引いたわけではなかった。1923年にはジョヴァンニ・ジェンティーレ文相の下で教育改革を担当した旧知の教育学者ロンバル

6 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.325.

7 Ibid., p.352.

8 Ibid., p.387.

ド・ラディーチェの要請によって、教科書検定中央委員会に参加している⁹。また、この年、中等学校用の副読本としてイタリア文学のアンソロジーを編纂することを思い付いている。この仕事だと、ジャーナリストの活動とは異なり、政治に関わらなくてもすむからである。このアンソロジーは1925年に二巻本として刊行された¹⁰。

そんなプレッツォリーニにとって、1923年、ニューヨークのコロンビア大学の夏期講座を担当したことは、将来につながる重要な出来事だった。彼にこの話を持ち込んだのは、海外情報サービスの関係者の一人で、コロンビア大学教授のアーサー・リヴィングストンだった。また、帰国後の9月8日の日記には、フランスの出版社のために「ファシズムに関する本を、歴史家の公平さと他の惑星の住人のような無関心さでもって書いている」と記している¹¹。

(2)

こうした閉塞的な状況にあってプレッツォリーニの気持ちがイタリアを出る方向に傾いていったのは当然かもしれない。1925年7月30日、パリの国際知的協力機関の幹部職員に任命されたとの知らせを休暇先で受け取った。この機関には当時ベルクソンやアインシュタインも関係しており、そこに地位を得ることは名誉なことであったが、ムッソリーニとの個人的な関係を利用してそれを得たという非難に対して、プレッツォリーニは後年、ムッソリーニの公電や国際連盟の議事録まで引用して執拗に反論している。良い地位を得るために権力者にすり寄ったと見られることは、彼の知識人としての矜持が許さなかった。この時イタリア政府が彼の指名に反対したのは、ファシズム政府が身内の人間をそのポストに押し込もうとする外務省の意向に配慮したため、と彼は見ている¹²。

パリ時代のプレッツォリーニの気分を一言で表すと、諦念である。1928年8月12日の日記に、ファシズムは祖国のために何かやれるという希望をすべて失わせた、と記し¹³、同年12月11日の日記には、歴史を作るのでできない人間は歴史を眺めるべきである、と綴っている¹⁴。そして、1930年1月19日の日記では、自己の心情を、グイッチャルディーニ流の諦念という言葉で、吐露している¹⁵。

そうは言っても、パリの知的協力機関での体験はプレッツォリーニにとって、興味深いものであった。後に彼は、パリの仕事は消耗ではあったが、国際的な問題について大いに勉強に

9 この委員会については、藤澤房俊『ムッソリーニの子供達 近代イタリアの小国民形成』ミネルヴァ書房（京都）2016年 173-179頁。

10 Giuseppe Prezzolini (a cura di), *I Maggiori I, II*, Mondadori (Milano), 1925

11 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.377.

12 パリに職を得る経緯については、Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile*, Rusconi (Milano), 1983, pp.236-238.

13 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.422.

14 Ibid., p.426.

15 Ibid., p.447.

なった、と回想している¹⁶。先に見たように、この機関にはベルクソンやアインシュタインをはじめとして当代一流の知識人が関係していたが、仕事を通じて彼らを間近に見ることは貴重な体験だった。しかしながら、当初はこの機関に無関心だったイタリア政府もその意義に気付くとともに関与を強めることとなり、そのことはイタリアを捨てたつもりでプレッツォリーニを困惑させるもととなった。また、1927年には没後四百年を記念して彼の著書としては珍しく、広く長く読まれることになるマキャベリの伝記を刊行しているが¹⁷、その執筆のためには早朝の出勤前の時間を当てなければならなかった。こうしたこともあって、プレッツォリーニは、イタリア政府の干渉の及ばない、より自由な時間に恵まれた、コロンビア大学の教授に就任する決断をするのである。

(3)

先に記したように、プレッツォリーニとアメリカの関係は海外情報サービスの時代に遡り、中でもこれを通してコロンビア大学教授のリヴィングストンと知り合ったことは重要な意味を持っている。リヴィングストンの斡旋により1923年と1927年にコロンビア大学の夏期講座を担当、次いで1929年には国際知的協力機関を休職、1930年にかけて1年間の任期でコロンビア大学の講座を担当した。そして、この年の4月、正式にコロンビア大学教授と同大学付属イタリア会館の館長に就任した。プレッツォリーニは、コロンビア大学が自分に白羽の矢を立てた理由として、イタリア会館の運営の難しさを挙げている。このことにも関連するが、アメリカの世論は、ムッソリーニとファシズム体制に非常に好意的だった。批判に転ずるのは、1935年のエチオピア侵攻以降である。イタリア会館は、長年の苦闘を経て経済的にの上昇によって自信を深めたイタリア系アメリカ人の寄金によって建設され、アメリカにおけるイタリア文化の拠点となるべく、1927年にコロンビア大学に寄贈された豪壮な建物である。資金を提供した人びとの大半はファシズム体制の支持者であったが、アメリカにはこれに批判的な人や、これに反対してイタリアから亡命した人も多く、その運営には微妙な舵取りが要求された。また、アメリカは1929年に世界恐慌に見舞われ、コロンビア大学はイタリア会館の維持・運営費を自分たちで調達しなければならなかった。プレッツォリーニはパリでも似たような微妙な地位にあったが、うまく切り抜けていたので、純粹の学者には期待できないそうした資質を買われて、館長就任を要請されたのではないかと回想している¹⁸。

上にも述べたように、イタリア会館の建設費用を提供した人びとの多くはファシズム体制に共感を寄せていた。そのため、当初からイタリア会館がファシズムの宣伝拠点になることが懸念されていた。大学はプレッツォリーニに対し、こうした懸念を裏付けるようなことはしない

16 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., p.240.

17 Giuseppe Prezzolini, *Vita di Nicolò Machiavelli fiorentino*, Mondadori (Milano), 1927. その後も版を重ね、多数の言語に翻訳されている。

18 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., p.269.

こと、同時にイタリア政府とは良好な関係を保つことを期待した。それは、彼に言わせると、困難ではあるが、不可能ではなかった¹⁹。1931年8月30日の日記に、政治的沈黙を守ることが自らに誓ったことを、彼は記している²⁰。彼はまた、政治を排除することでファシズム当局から独立を保つことに重きを置いた、と回想している²¹。

そうしたプレッツォリーニの姿勢にもかかわらず、ファシズムと反ファシズムの対立の渦中に巻き込まれることは避けられなかった。先にも見たように、イタリア会館をファシズムの宣伝の拠点にしているという非難がパンフレットや雑誌を舞台に展開されたのである。1934年10月27日の日記には、こうしたキャンペーンの背後にはアメリカに亡命していた歴史家ガエターノ・サルヴェーミニがいることが記されている²²。確かにプレッツォリーニはイタリア当局との関係を保持したし、ときにはムッソリーニを訪ねさせた。しかし、それは、アメリカにおいてイタリア文化の振興をはかり、イタリア語の学習を助長するという共通の関心のためである。

しかしながら、反ファシズム陣営のこうした非難キャンペーンの思いがけない結果として、イタリア当局のプレッツォリーニに対する評価が好転したことがある。そうした中で、当時イタリア文化の世界で重鎮になっていた旧友のパピーニや世界的な劇作家のピランデッロによって、プレッツォリーニを帰国させてイタリアの対外文化活動の総括責任者の地位に就けようという動きが進められていた。この話には大いに心を惹かれるものがあったが、イエスとノーがはっきりしたアメリカ流に慣れてしまったこともあって、何度か蒸し返されはしたが、結局乗ることはできなかった²³。

そうこうするうちに、ヨーロッパ情勢に暗雲が垂れ込めてきた。1936年にスペインでフランコ将軍が反乱を起こすと、イタリアはドイツと共に公然とこれを支援、翌1937年には日独防共協定に加わった。1938年5月、ヒトラーはイタリアを訪問、イタリアでもユダヤ人排斥が始まった。英仏に対抗してドイツとの結びつきを強めたことによって、当然アメリカでもイタリアは自由と民主主義の敵と見なされるようになった。

これに伴ってアメリカでのプレッツォリーニの立場も微妙なものになった。それでも、1938年9月26日の日記には、コロンビア大学のニコラス・バトラー学長がプレッツォリーニに、イタリアが参戦するようなことになっても、彼の地位に変更のないことを伝えたことが記されている²⁴。1939年9月1日、ドイツ軍がポーランドに侵入、これに対し英仏はドイツに宣戦、ヨーロッパでは第二次世界大戦が始まった。こうした情勢の下、プレッツォリーニは1940年1月、アメリカの市民権を取得した。6月にはイタリアも英仏に宣戦、11月に彼はイタリア会

19 Ibid., p.265.

20 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.483.

21 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., p.271.

22 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.533.

23 Ibid., p.546.

24 Ibid., p.600.

館の館長を辞する意思を学長に伝え、同年末に辞任、会館内の宿舎を引き払い、ニューヨーク市内にアパートを借りて引き移った。

(4)

さらに、1941年4月24日の日記には、転居したことが記されている²⁵。ペントハウスという聞こえは良いが、そこはビルの屋上に建てられたトイレも共用の船室のような狭い小屋だった。プレッツォリーニは17年間そこに住むことになる。しかし、イタリア会館の館長を辞し、この時代の彼は勉強のための時間をより多く持つことができた。完全に社交生活を放棄したこと、修道士のように暮らしていること、より入念に授業の準備をしていること、数千通もの手紙を整理していること、ロシア語を勉強していることなどが回想されている²⁶。

だが、そんな彼の隠遁的な生活も時代の動きに揺さぶられた。1941年12月22日の日記には、《交換リスト》に加えられたことを伝えるイタリア大使の手紙を19日に受け取ったが、自分はアメリカ市民なので交換船でイタリアに帰国することは不可能であると回答したことが、記されている²⁷。日本軍が真珠湾を攻撃したことによりイタリアもアメリカと交戦状態に入っていたのである。若者が戦争に駆り出されることになると、敵国イタリアの言葉を学ぶ学生はますます減少する。1942年9月23日の日記には、学生がいなくなった場合に備えて女子大で英語で講義する準備を進めていることが記されている²⁸。また、同年12月19日の日記には、外国語や外国文学の教員は不用品になるかもしれない、という苦い思いが綴られている²⁹。アメリカにおけるイタリア文化とイタリア語の普及を目指したプレッツォリーニのこれまでの努力は戦争のために打ち砕かれようとしていた。

それでも、ヨーロッパと違ってアメリカでは戦争は直接市民生活を脅かすものではなかった。ところが、青天の霹靂のようにF.B.I.の召喚と言う事態が彼を見舞った。1943年4月18日の日記で彼は、それは彼からアメリカの市民権を取り上げるためのものであり、誰かの告発に基づいて行われたことを推測している³⁰。アメリカにとって好ましくない人物として市民権を剥奪されれば、国外追放もありえる。しかし、何とかそのような事態には至らず、1945年4月のファシズム体制崩壊とイタリアの解放まで、コロンビア大学教授として無事にアメリカで暮らすことができた。

25 Ibid., p.663.

26 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., pp.368-370.

27 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., pp.676-677.

28 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1942-1968* cit., p.27.

29 Ibid., p.33.

30 Ibid., p.44.

第2章 ムッソリーニとプレッツォリーニ

我が国で刊行されたムッソリーニやファシズムに関する書物は、筆者の知る限り、プレッツォリーニについて、ほとんど言及していない。著者たちがあまりプレッツォリーニに興味がなかったためかもしれない。近年翻訳されたニコラス・ファレルの浩瀚なムッソリーニの伝記は、ムッソリーニが1910年に、プレッツォリーニが主宰する《ラ・ヴォーチェ》にトレンティーノについて寄稿していたことに軽く触れている程度である³¹。それに対し、元外交官で日本研究者のロマノ・ヴルピッタはそのムッソリーニの評伝の中で《ラ・ヴォーチェ》とムッソリーニの関係についてももう少し紙面を割いている³²。確かに、ムッソリーニとプレッツォリーニの間にはかなり緊密な関係が長年にわたって存在していた。プレッツォリーニは度々ムッソリーニのことに言及している。また、この関係はプレッツォリーニの側からの一方的なものではなく、特に若き日のムッソリーニにとって、プレッツォリーニの存在は大きなものであった。

(1)

エミリオ・ジェンティーレが編纂した『ムッソリーニとラ・ヴォーチェ』という書物の中には、1909年から1920年にかけてプレッツォリーニに宛ててムッソリーニが書いた手紙が74通も収録されている³³。プレッツォリーニは、その自伝的エッセーの中の『ラ・ヴォーチェ時代のムッソリーニ』という章の中に、多分1914年に書かれたものとして、ムッソリーニの手紙を引用している³⁴。そこでムッソリーニは、最初は《レオナルド》という学校で、次いで《ラ・ヴォーチェ》という学校で自分は育まれたとして、プレッツォリーニに感謝を捧げている。また、自分の伝記作者イヴォン・ド・ベニヤックに度々プレッツォリーニのことを語り、ときには「わが友プレッツォリーニ il mio amico Prezzolini」とさえ呼んでいる³⁵。

プレッツォリーニは、ファシズム崩壊から2年以上が経過した1947年9月27日の日記に、イタリア人がムッソリーニの前に跪くはるか以前に彼を発見し、イタリア人に示したのは自分である、と記している³⁶。また、自伝的エッセーの中でも、彼を最初に発見し知らせた人間の一人である、と語っている³⁷。そして、彼との間には常に良好な個人的関係が存在し、今に

31 ニコラス・ファレル 柴野均訳 『ムッソリーニ 上』 白水社（東京）2011年 78頁。

32 ロマノ・ヴルピッタ 『ムッソリーニ—イタリア人の物語』 中央公論新社（東京）2000年 71,72,74頁。

33 Emilio Gentile (a cura di), *Mussolini & La Voce*, Sansoni Editore (Firenze), 1976, pp.34-79.

34 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., p.203.

35 Francesco Perfetti (a cura di), Yvon De Begnac, *Taccuini mussoliniani*, Il Mulino (Bologna), 1990, p.329, p.470.

36 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1942-1968* cit., p.113.

37 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., p.209.

なってそれを否定するのは卑怯というものだろう、と語っている³⁸。二人の関係は1909年のはじめに遡る。この当時、ムッソリーニは、オーストリア領だったトレントに住む無名の社会主義者だった。彼よりも1歳半年長のプレッツォリーニは、パピーニと共に1903年に雑誌《レオナルド》を創刊、すでに著書も何冊か出しており、1908年12月には雑誌《ラ・ヴォーチェ》を創刊し、一部の人びとの間ではその存在を知られていた。

プレッツォリーニがムッソリーニの名前をはじめて知るのは、《ラ・ヴォーチェ》の定期購読を申し込む彼の5リラの為替葉書が届いたからである。これを機に二人の文通が始まり、ムッソリーニはトレントでの《ラ・ヴォーチェ》の読者の開拓に協力、1910年1月6日には『トレンティーノにおける言語闘争』、同年12月15日には『トレンティーノ』を《ラ・ヴォーチェ》に掲載している³⁹。これは、ズラタベルの『トリエステからの手紙』など、《ラ・ヴォーチェ》の創刊直後に始められた、イタリア各地の問題を取り上げる企画の一環だった⁴⁰。翌年にはこれをもとに『一社会主義者の見たトレンティーノ』がラ・ヴォーチェ叢書の一冊として上梓されている⁴¹。しかし、ムッソリーニの寄稿は1910年の二回だけで、彼は《ラ・ヴォーチェ》の熱心な書き手にはならなかった。社会党の有力幹部として頭角を現し、《アヴァンティ》の編集長に就任するなど党務に忙殺されたためかもしれない。

ムッソリーニとプレッツォリーニの関係は、1914年夏の第一次大戦勃発を機に再び緊密になる⁴²。この年の6月28日のオーストリア皇位継承者夫妻の暗殺事件をきっかけに7月28日にオーストリアはセルビアに宣戦、8月に入ると、オーストリアの同盟国ドイツ、セルビアを支援するロシア、ロシアと友好関係にある英仏も参戦、戦火は拡大した。イタリアはドイツ・オーストリアと三国同盟を結んでいたが、中立を表明した。これに対し、プレッツォリーニは英仏露の三国協商の側での参戦を主張、《ラ・ヴォーチェ》の編集長を辞する決意を固める。そして、10月13日の同誌においてラ・ヴォーチェの署名を付した巻頭の論文の中で、ムッソリーニを名指して、勇気を出して党の方針に反する参戦論に踏み出すことを促している⁴³。それに応えるかのように、ムッソリーニは11月15日に参戦論を掲げる新聞《イル・ポーポロ・ディターリア》をミラノで創刊、その直後に社会党を除名されている。一方、11月28日の号を最後に《ラ・ヴォーチェ》の編集長を辞したプレッツォリーニは、参戦運動に邁進するため12月に居をローマに移し、政治担当のローマ特派員という立場でムッソリーニの新聞に協力した。デ・フェリーチェは、このおかげで《イル・ポーポロ・ディターリア》は知識人たちの

38 Ibid., pp.209-210.

39 Benito Mussolini, *La lotta linguistica nel Trentino*, in 《La Voce》, 1910.1.6.; *Il Trentino*, in 《La Voce》, 1910.12.15

40 Scipio Slataper, *Lettere triestine* I, II, III, in 《La Voce》, 1909.2.11, 1909.2.25, 1909.3.11

41 Benito Mussolini, *Il Trentino veduto da un socialista*, Casa Editrice Italiana (Milano), 1911. Emilio Gentile (a cura di), *Mussolini & La Voce* cit., pp.95-159 に収録されている。

42 プレッツォリーニの第一次大戦との関わりについては、拙稿「第一次大戦とプレッツォリーニ」、『地中海研究所紀要』第3号、2005年。

43 La Voce, *I socialisti non sono neutrali*, in 《La Voce》, 1914.10.13

間で敬意を獲得することができた、としている⁴⁴。プレッツォリーニ自身も自伝的エッセーの中で、ムッソリーニはこのポストをズラタベルに提供するつもりだったが、海の物とも山の物ともつかないこの新聞にズラタベルが乗らなかったのも、自分にお鉢が回ってきた、と回想している⁴⁵。

(2)

1915年5月にイタリアが参戦すると、プレッツォリーニとムッソリーニは二人とも従軍、大戦終結から4年が経過した1922年10月31日、ムッソリーニは首相の座に着いた。この時、プレッツォリーニはファシズムに対して明確な態度を取る気になれなかった。この日の日記では、ファシズムは粗野で無教養で言論の自由を踏みこむものである、と断じながら、ファシズムに若さと何か新しいことを始める可能性を認めている⁴⁶。そして、先に見たように、12月26日の日記では、絶望と失意の日々を過ごしていること、すでに言論の自由が完全に失われたことを嘆きながら、ファシズムの支配が一世代（25年間）は続くことを予感している⁴⁷。彼がそう信じた理由は、ファシズムがイタリアに深く根差したものであると認識するとともに、ファシズム支配が短いと考えたトゥラーティやサルヴェーミニとは異なり、ムッソリーニの能力を高く評価していたからである。1923年8月（日にちが明記されていない）の日記には、ムッソリーニは一度権力を手にしたら、それが奪い去られるのを許すような人間ではなく、彼の尻の下から椅子を取り去る能力のある、あるいはそれを企てるだけの決断力のある人間は誰もいないことが記されている⁴⁸。プレッツォリーニによると、ジョヴァンニ・アメンドラが1910年に《ラ・ヴォーチェ》に記した「我われは今日のようなイタリアは嫌だ *L'Italia come oggi è, non ci piace*」という文句が仲間たちの合言葉になっていて⁴⁹、あの時代、仲間たちの誰もがイタリアを作り直す青写真を持っていたが、現実の政治の舞台でそれを実現する権力を手にしたのはムッソリーニだけであり、ある意味でムッソリーニは《ラ・ヴォーチェ》の理想の実現のように見えていた、と彼は回想している⁵⁰。

つまり、ファシズムのやり方には嫌悪を抱きながら、ムッソリーニが権力を握ったとき、プレッツォリーニは彼に期待を感じていたのである。ファシズム体制が崩壊して1年余りが経過した1946年5月15日の日記には、「ムッソリーニがイタリアの欠陥（美辞麗句、芝居っ気、

44 Renzo De Felice, *Prezzolini, la guerra, il fascismo*, in 《Francesca Pino Pongolini (a cura di), *Giuseppe Prezzolini Atti delle giornate di studio 27 gennaio e 6 febbraio 1982*》, Dipartimento della pubblica educazione (Bellinzona), 1983, p.41.

45 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., p.204.

46 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.363.

47 Ibid., pp.363-364.

48 Ibid., p.374.

49 Giovanni Amendola, *Il convegno nazionalista*, in 《La Voce》, 1910.12.1

50 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., pp.210-211.

見栄っ張り)の解毒剤になってくれるという私の期待は潰えた」と記している⁵¹。また、自伝的エッセーの中で、個人的にはムッソリーニのことが好きだったが、彼の体制は嫌いだった、と回想している⁵²。デ・フェリーチェは、プレッツォリーニがファシズムとムッソリーニを別個のものに見なし、前者に対してはほとんど否定的、後者に対してはかなり肯定的であったことを認めている⁵³。デ・フェリーチェはさらに、プレッツォリーニの立場をファシズムにはノー、ムッソリーニにはイエスと要約し、ファシズムはイタリア人の欠陥の極限であり、ムッソリーニは最良の方法でこの悪弊を制御している、と認識していたことを指摘している⁵⁴。プレッツォリーニ自身、1923年3月18日の日記に、「私はときに、ムッソリーニはファシストたちから解放されたいと願っているが、それができないではないか、と自問することがある。私は、何も求めず、頭も下げないという政府に対する私の態度に満足している」と記している⁵⁵。

ムッソリーニが政権を握ったとき、プレッツォリーニはムッソリーニとの古くからの個人的関係を利用して良い地位を求めたこともできなかった。しかし、知識人としての矜持がそれを許さず、さりとてファシズムに反対する運動に身を投ずる気にもなれなかった。無力感に打ちひしがれたプレッツォリーニはこの年の9月16日の日記には、「私も抵抗しないことでファシズムに貢献している」と記し⁵⁶、心は次第にイタリアを離れる方向に傾いていった。プレッツォリーニが再びムッソリーニと接触するのは1925年、旧友のコロンビア大学教授リヴィングストンの要請によって、イタリア政府の支援を求めていたイタリア会館の建設委員会のメンバーの一人と、寄付が期待されるイタリア系アメリカ人を一人、ムッソリーニに引き合わせるためであった⁵⁷。しかし、このことを例外として、1920年代は二人の関係は疎遠のままであった。両者の関係が再開するのは1930年にプレッツォリーニがコロンビア大学教授と同大学に付属するイタリア会館の館長に就任して以降である。1939年ヨーロッパに第二次大戦が勃発すると、プレッツォリーニは家族やイタリアから切り離されるが、前年の1938年までは夏休みをヨーロッパで過ごし、その度にムッソリーニを訪ねていた。その際、二人は友人として打ち解けた話し方をしたが、この訪問は公的なものであったことを、彼は回想している⁵⁸。イタリア会館の運営委員会もこの訪問のことを知っていたし、学長も承認しており、イタリアの新聞もこれを伝えていた。プレッツォリーニは自分を大学の使者と感じ、イタリアに留学する学生のための奨学金など、イタリア政府の支援を引き出すことを目的としていた。

先に見たように、そのことがサルヴェーミニらファシズムに反対する人びとによる非難キャ

51 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1942-1968* cit., p.95.

52 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., p.269.

53 Renzo De Felice, *Prezzolini, la guerra, il fascismo* cit., p.65.

54 Ibid., pp.66-67.

55 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.368.

56 Ibid., p.377.

57 Giuseppe Prezzolini, *L'italiani inutile* cit., p.211.

58 Ibid., pp.212-213.

ンペーンを引き起こしたが、プレッツォリーニに対するイタリア政府の評価も好転させ、パピーニやピランデッロはそれを利用する形でプレッツォリーニを帰国させて、イタリアの対外文化活動の責任者に据えることを目論んだのである。このことに関連して、プレッツォリーニは1936年6月30日の日記に、パピーニが彼に、その承認を求める手紙をムッソリーニに書くように強く求めたが、それをする気にはなれないことを、書き留めている⁵⁹。ムッソリーニが権力の座に着いて以降、プレッツォリーニがムッソリーニに頼みごとをしたのは一度だけで、1937年7月24日の日記に、反ファシズムの運動に関わったことで長く獄中にあった、海外情報サーヴィス時代の同僚レンツォ・レンディの釈放を求めたことが、記されている⁶⁰。ムッソリーニはメモを取り、間もなくレンディは釈放された。

(3)

数年前プレッツォリーニの伝記を刊行したサンジュリアーノは、プレッツォリーニがファシズムとムッソリーニを切り離して見ていたとする、先に紹介したデ・フェリーチェの見解を踏襲して、次のように述べている⁶¹。

「最も手厳しいものも含め、プレッツォリーニのファシズムに関する分析のすべてにおいて、ムッソリーニという人物像は常に損なわれることがなかった。ムッソリーニに対しては、ある種の称賛が無傷のまま残ることになる」

しかし、実際には1935年のエチオピア侵略に関して、プレッツォリーニはムッソリーニに批判的で、この問題について彼と議論したことを回想している⁶²。また、1935年7月23日の日記には、エチオピアと戦争することは有益とも賢明とも思えない、と記されている⁶³。

プレッツォリーニは1924年にムッソリーニについての小さな本を刊行しているが、この年の8月22日の日記に、出版業者フォルミッジーニからムッソリーニについて論文を書くことを依頼されたが、反ファシズムの指導者アメンドラについての論文も書くことを条件に引き受けたことを記している⁶⁴。その結果、アメンドラについての本も翌年刊行された⁶⁵。この辺りがいかにもプレッツォリーニらしい。ごく短期間で書かれたこの書物は59ページの小冊子で、詳細な伝記ではなく、簡潔な人物スケッチである。プレッツォリーニはこの種の文章を得意としていて、ムッソリーニの人となり鮮明に描き出している。検閲もあってムッソリーニに批判的な本を刊行することが難しかったことは確かであるが、プレッツォリーニの性格からして

59 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.555.

60 Ibid., p.571.

61 Gennaro Sangiuliano, *Giuseppe Prezzolini L'anarchico cnservatore*, Mursia (Milano), 2008, p.320.

62 Giuseppe Prezzolini, *L'italiano inutile* cit., pp.217-218.

63 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.547.

64 Ibid., p.387.

65 Giuseppe Prezzolini, *Quattro Scoperte Croce · Papini · Mussolini · Amendola*, Edizioni di storia e letteratura (Roma), 1964に収録されている。pp.151 -173 (Mussolini), pp.175-197 (Amendola) この版を使用した。

自説を曲げてまで体制に阿るような本を書くことはありえないので、政権獲得から2年が経過したこの時点で、プレッツォリーニがムッソリーニをどう評価していたのか、この小さな書物を通して見ていくことにしよう。

プレッツォリーニは、ムッソリーニの故郷であるロマーニャ地方の政治風土、精神風土を説き起こすことからこの小さな書物を始めている⁶⁶。彼によると、ロマーニャでは政治がすべてであり、全員が党派に所属していた。事実、ムッソリーニの父親はインターナショナルの熱心な活動家で、警察に逮捕されたこともあった。プレッツォリーニは、詩人パスコリなどを引いてロマーニャを、人びとが情熱的な恋とけんかに明け暮れる、あふれんばかりの力に満ちた、狂暴ではあるがまっとうな、半ば未開の社会として提示している。こうしたロマーニャの風土がムッソリーニの反逆精神を培ったのである。

プレッツォリーニは、ムッソリーニをルネッサンスの傭兵隊長のような古典的タイプのイタリア人であると見なす一方で、ある種の近代性を彼に認めている。ムッソリーニは1912年に社会党の機関紙《アヴァンティ》の編集長に就任するとミラノに移り住んだが、プレッツォリーニは、ロマーニャに次いでミラノがムッソリーニに深い痕跡を残したことを指摘、ムッソリーニの近代性をミラノと関連付けて説明している⁶⁷。プレッツォリーニによると、ミラノはイタリアで唯一近代性が躍動している都市で、ロマーニャの鍛冶屋の工房から生まれ、ミラノの巨大な工場の煙突の間で成長したムッソリーニは、農民のメンタリティを持たない、スピードとメカニズムの男ということになる。この決めつけはいささか短絡的にも思えるが、ムッソリーニの姿をくっきりと浮かび上がらせてくれる。ミラノは1909年に未来派が産声を上げた都市でもあるが、プレッツォリーニはさらに、ムッソリーニが若々しい感性でもって同時代の芸術を理解したイタリアで最初の政治家である、と指摘している⁶⁸。

プレッツォリーニがファシズムとムッソリーニを区別して考えていたとするデ・フェリーチェの見解を先に紹介したが、こうした彼の態度はこの小著にもはっきりと打ち出されている。プレッツォリーニは、ムッソリーニが首相に就任して以降、彼の真の敵は共産主義でも社会主義でもなく、ファシズムであり、ファシズムに対する彼の戦いが始まった、と述べている⁶⁹。プレッツォリーニはまた、ムッソリーニがいなかったら、ファシズムの運動は四散したか打倒されていただろう、ファシズムはほとんどすべてをムッソリーニに負っているが、ムッソリーニはほとんど何もファシズムに負っていない、と断じている⁷⁰。これでもわかるように、ムッソリーニの類まれな力量に対する称賛がこの小著の基調をなしている。

さらにプレッツォリーニは、自由が制限されるという犠牲を払っても人びとが社会の安定を

66 Ibid., pp.154-155.

67 Ibid., pp.166-167.

68 Ibid., p.170.

69 Ibid., p.167.

70 Ibid., p.162.

求めているあの時期に、状況を把握する鋭敏な能力を備えたムッソリーニが、時宜を得たかのように登場したことを認めている⁷¹。プレッツォリーニはまた、第一次大戦後世界に注目された三人の政治家として、ウイルソン、レーニンと並べてムッソリーニの名前をあげ、この三人の中で現在もその実験が進行中なのはムッソリーニのみである、と手放しで持ち上げている⁷²。イタリアという国の規模を考えるとこの評価はやや過大とも思えるが、彗星のように現れたムッソリーニはこの時期世界でも注目されていた。そして、プレッツォリーニは、現在の状態を過渡期と認め、正常な状態に戻るためにムッソリーニに人材を提供することが国の務めである、と締めくくっている⁷³。

第3章 ファシズムについての二つの書物

プレッツォリーニは生涯に、性格や成り立ち、刊行された時期がまったく異なる、ファシズムに関する二冊の本を刊行している。一つはフランスの出版社の依頼による書き下ろしで、1923年から24年にかけて書かれ、翌25年にフランス語の翻訳が『ファシズム』というタイトルでパリで出版され、1926年と27年に英語版がロンドンとニューヨークで刊行されている⁷⁴。もう一つは1976年にプレッツォリーニの編纂によって『ファシズムについて (1915-1975)』というタイトルで刊行されている⁷⁵。これには、新聞や雑誌に掲載された記事、日記の抜粋、書評、別の彼の著書の一部を抜き出したものなど、書かれた時期も性格も異なる雑多な文章が収録されている。

(1)

『ファシズム』の最後にプレッツォリーニは「結語」と題した短い文章を配しているが、その中で彼は、「この本において私の目的は理論づけることではなく、公正な歴史家、細心な観察者として、ファシズムの誕生と発展を説明することだった」と述べている⁷⁶。先にも、「ファシズムに関する本を、歴史家の公平さと他の惑星の住民のような無関心さでもって書いている」という、1923年9月8日の日記の一節を引用したが⁷⁷、まだファシズム体制の基盤が固まっておらず、ファシズムの陣営と反ファシズムの陣営の権力闘争が継続中のこの時代にあっ

71 Ibid., p.164.

72 Ibid., p.172.

73 Ibid., p.173.

74 Giuseppe Prezzolini, *Le fa.scism*, traduit par George Borgin, Bossard (Paris), 1925. Giuseppe Prezzolini, *Fascism*, transl. by Katheleen Macmillan, Methuen & Co. (London), 1926, E.P.Dutton & Co. (New York), 1927. 英語版の復刊 Ams Press (New York), 1982 を使用。

75 Giuseppe Prezzolini, *Sul fascismo (1915-1975)*, Pan (Milano), 1976

76 Giuseppe Prezzolini, *Fascism* cit., p.175.

77 Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941* cit., p.377.

て、どちらの陣営にも与せず冷静な観察者であろうとするプレッツォリーニの知識人としての姿勢は稀有なものである。時代に背を向けて学問や芸術の世界に閉じこもる人はいただろうが、彼の態度はそれとは違う。その意味でも、この本はプレッツォリーニの知識人としての生き方を考える上でも興味深い。それに関連して、プレッツォリーニとピエロ・ゴベッティの、知識人と政治をめぐる論争は避けることのできないテーマであるが、今回はこれには立ち入らない⁷⁸。

この本は8章からなり、英語版では、訳者は最終章として、1925年から26年にかけてのファシズムとイタリアの推移を付け加えている。この最終章とプレッツォリーニの序文を加えても全体で200ページほどの小さな本であるが、盛り込まれた内容は多様で、どうかするとやや雑然とした印象を与える。プレッツォリーニは、今後どのように推移するのか予測の難しい流動的な現象を、基礎知識の乏しい外国の一般読者に限られた紙数で説明するという困難な課題に挑んだわけだが、読みにくい部分もあるが、ある程度この課題に成功している。ファシズム期のイタリアに通じている人には自明のことかもしれないし、間違いも含まれるのかもしれないが、筆者には今読んでも十分面白く、啓発されるところ大であった。その辺の所を少し記してみたい。

プレッツォリーニはまず序論において、ファシズムを理解するためにはイタリアの政治風土を知ることが必要なことを説き、イタリアの政党では英米とは異なり党の綱領より指導者個人の資質が重きをなすこと、イタリアの政治は地方の特性に影響されていること、イタリアはまだ資本主義の領域に踏み入れていない、地方的な利害に動かされる家父長的な国であること、イタリアの政治においてはいまだに君主制が重要な要素であること、以上4点を挙げている⁷⁹。

そして、第1章「ファシズムの黎明」はこの序論の考えに立って叙述が展開されている。この章がこの本では一番長く、筆者には興味深かった。プレッツォリーニはまず、大戦後の社会の混乱の要因として、動員解除によって大量の余剰人員が国土にあふれ返ったことを挙げている⁸⁰。勝利は期待された果実を彼らにもたらさなかった。退役した軍人は帰還しても居場所はなく、困窮と幻滅に苦しむことになった。1919年3月、ムッソリーニがこれら現状に不満を抱く退役軍人を中核にイタリア戦闘ファッシ *Fasci italiani di combattimento* を結成したことを、プレッツォリーニは説明している。さらに、当時のイタリアの指導階層は、ファシズムによって社会主義を抑え、イタリアに再び秩序を確立できると考え、1920年6月から21年7月まで首相を務めたジョリッティはこの目的のためにファシストに武器を提供するという大きな間違いを犯し、雲行きが怪しくなるや内閣を投げ出したことなどを、歯切れのい

78 ピエロ・ゴベッティについては、中村勝己氏が精力的に研究を進めている。中村勝己「ピエロ・ゴベッティの思想と生涯—ファシズム台頭期を中心に」『法学新報』112-7/8 2006年など。

79 Giuseppe Prezzolini, *Fascism* cit., pp.V-X.

80 Ibid., p.3.

い文章で描いている⁸¹。

プレッツォリーニは他にもこの章で、ボローニャやフェラーラ周辺のポー川流域の農村地域におけるファシズムの浸透について説得力ある説明を行っている。もとはよんだ水と荒れ果てた平原からなるマラリアの蔓延する不毛の地域だったが、数世紀にも及ぶ人間の努力によってイタリア有数の肥沃な農業地域になったこと、そのためもあって日雇い労働者 *bracciante* が主要な耕作の担い手として導入され、そのことが農村地帯としては珍しくファシズムの隆盛につながったことなどを、説明している。常識的かもしれないが、ストライキの熱狂による社会の混乱や、イタリアに民主主義や議会制度の伝統が存在しないという指摘は、ファシズム勃興の土壌を説明するにあたり外すわけにはいかなかっただろう。

第2章「ムッソリーニ」は、先ほど見た1924年刊行の小著『ムッソリーニ』のかなりの部分をそのまま使っているが、この本では触れなかった1924年6月のマッテオッティ事件のことが記述されている。第3章「ファシズムの他の指導者たち」では、「新しい人びと」として11名の人物を取り上げているが、その中で歴史に大きく名を残しているのは、地方のボスから出発して国民ファシスト党の書記長に就任するロベルト・ファリナッチと、ヴィチェンツァの専門学校で政治経済学を教え、ファシズム政権の誕生とともに財務相に就任するアルフレード・デ・ステファニくらいである。ファシズムの暗い面を代表する人物たちも取り上げているのは、ファシズムのさまざまな特徴を鮮明に浮かび上がらせるねらいがあったのかもしれない。デ・ステファニにはかなりの紙数を当て、「予算の均衡をはかり、国を救った」と高く評価している⁸²。彼のことは第7章「ファシズムの諸改革」でも再び論じている。

第4章「ファシズムと文化」では、ファシズムと未来派を対比した節が要領よくまとめられていて、興味深く読むことができた。プレッツォリーニはまず、ファシズムの中に未来派が存在することを認めている⁸³。確かに、両者ともミラノで生まれ、スピードや暴力への熱狂、戦争の賛美など、共通するものは多い。政治的にも初期において両者は共闘した。しかし、ファシズムが政権を握ると、事情は変わってくる。ムッソリーニはすぐに古い友人である未来派との関係を断つことはなかったが、次第に両者の隔たりが露呈してくる。ファシズムがカトリックを含む過去の偉大なイタリアに回帰していくのに対し、未来派あくまでも伝統や古典には反対である。プレッツォリーニに言わせると、ファシズムがイタリアに根差した政治運動であるのに対して、未来派は本質的に国際的な運動で、革命後のロシアで真にその本領を發揮した⁸⁴。

プレッツォリーニはこの章で、思索よりも行動に重きを置くファシズムの反知性主義を踏まえた上で、文学者のクルツイオ・マラパルテと画家で文学者でもあるアルデンゴ・ソッフィチ

81 Ibid., pp.15-16.

82 Ibid., p.80.

83 Ibid., p.84.

84 Ibid., p.87.

に言及している。この二人にファシズムの時代の息吹を感じたということだろう。また、哲学者ジョヴァンニ・ジェンティーレにも多くの紙数を割いているが、そのほとんどは1924年3月31日のジェンティーレの演説からの引用である。しかし、ジェンティーレの哲学がファシズムの指導者たちの知性の中に浸透することはなかった、と断っている⁸⁵。

ファシズムの文化について他にあまり語ることがなかったとしても、この本が書かれたのが、文化よりは政治の時代である1923年から24年にかけてであることを考えれば、致し方ないかもしれない。ファシズム政権が成立したからといって、イタリア文化が急に変わるはずもなく、多くの作家や芸術家はそれとは関係なく、これまで通り仕事を続けていたのではないだろうか。

第5章「ファシズム国家」では、政権樹立後の制度や組織、国の機関、団体や結社、新聞や雑誌などを扱っているが、冒頭近くの「ファシストは古い構造を一掃せず、単にそれに付け加えただけだった」、「イタリアでは古いものと新しいものが並んで存在していた」といった言葉に⁸⁶、1924年という時点におけるプレッツォリーニのイタリアの現状認識が集約されている。第6章「ファシズム、カトリシズム、ナショナリズム」は、ファシズムとヴァチカン、フリーメーソン、ナショナリズムの関係を論じている。特にフリーメーソンやナショナリズムとの関係を扱った部分が、こちらにあまり予備知識がないこともあって、新鮮だった。

第7章「ファシズムの諸改革」では、プレッツォリーニはまず、ファシズムがいくつもの重要な改革を達成したことを認めた上で、ファシズムによって成し遂げられた社会の安定と秩序が、政治的自由や個人の自由を犠牲にして獲得されたことを指摘している⁸⁷。その上で、この章の趣旨からはやはりはずれるのかもしれないが、ほぼ三分の一の紙数を当ててこの時代の自由について論じている。その最後でプレッツォリーニは、イタリア国民はアングロ・サクソンの国々のような自由の伝統を持っておらず、議会制度も英仏からの借りものである、と断じている。そして、自らの世代が1900年前後以降、パレート、クローチェ、ジェンティーレ、ソレル、オリアーニ、パピーニらによって醸し出された、本質的に反議会主義の空気の中で育まれたことを認めている。さらに、大戦後の混乱もあって、議会制度に対する不信は頂点に達し、代議士は腐敗と不正の要因と見なされるまでに至り、議会制度を守るために自己を犠牲にする気は誰にもなくなっていた、と結んでいる⁸⁸。

この章でプレッツォリーニが扱っているのは、デ・ステーファニの財政改革とジェンティーレの教育改革などである。ジェンティーレは実用的な教育よりも人間形成を目指す教育、人文主義的な教育を目標に、中等学校にラテン語、小学校に歌唱と図画を導入した。これらの改革は主に自由主義期に提案されたものであったが、この時代には欠けていた実行する意志をファ

85 Ibid., p.97.

86 Ibid., p.106.

87 Ibid., p.147.

88 Ibid., pp.151-152.

シズムが提供したことを、プレッツォリーニは認めている⁸⁹。

第8章「ファシズムの外交」では、ファシズムよりもムッソリーニのものと断った上で⁹⁰、プレッツォリーニはイタリアの外交を好意的に説明している。ここでも、ファシズム体制ではなく、ムッソリーニ個人に対する彼の高い評価が認められる。政権を握ると、ムッソリーニは、党の指導者よりも政府の指導者の立場を優先させ⁹¹、従来のファシズムの強硬な思想を封印し、イタリア国民の利益にかなう周到な平和的政策を慎重に実行した。

(2)

『ファシズムについて (1915-1975)』の序文の中で、プレッツォリーニは、知識人は党派ではなく知性に対して義務を負っており、自分は知性に忠実であろうと努めてきた、と述べ、そして、自分が考えていたこと以外は発表しなかったこと、予想を上回る目まぐるしい変化に伴って見解が変化せざるをえなかったことを断った上で、この本は研究のアンソロジーではなく、証言のアンソロジーである、と明記している⁹²。

1920年代の文章としては内外の新聞や雑誌に寄稿した記事や講演のための原稿などが収録されているが、ファシズムは客観的かつ公平に記述されている。ここでも知識人の姿勢に関する言及が目を引く。例えば、1923年2月8日の《ラ・プロヴィンチャ・デイ・コモ》の記事では、自分を窓際の観察者と見なし、そのため路上の人とは少し違った見方ができる、と認めている⁹³。また、1925年4月21日に発表されたジェンティーレの起草による「ファシスト知識人宣言」と5月1日のクローチェの起草による「ファシスト知識人宣言に対する作家・学者・著述家の回答」に関連して5月26日の《レスト・デル・カルリーノ》に寄せた文章では、知識人は政治党派に所属することはできない、もし所属すると、知識人が受け入れることのできない隷属や思考の放棄を要求される、と述べている⁹⁴。

1930年代の文章としては、1933年7月21日にゲラルド・カジーニ編集の《ラヴォーロ・ファシスタ》に寄稿したイタリアの旅日記が注目される。プレッツォリーニは、この時期イタリアが面目を一新し、市民生活が見違えるほど便利で快適になった様子を描写している。それもあって、この時期イタリア国民のファシズムとムッソリーニに対する支持は頂点に達していた。プレッツォリーニは、この記事を彼が書いたものの中で最もファシズムに好意的と解説している⁹⁵。しかし、この記事は彼には無断でニューヨークのイタリア系アメリカ人の雑誌に掲載され、アメリカに亡命していたサルヴェーミニらによるプレッツォリーニに対する弾劾キヤ

89 Ibid., p.153.

90 Ibid., p.173.

91 Ibid., p.164.

92 Giuseppe Prezzolini, *Sul fascismo (1915-1975)* cit., p.9.

93 Ibid., p.43.

94 Ibid., p.67.

95 Ibid., p.109.

ンペーンの証拠として利用された。プレッツォリーニがこの本にこの記事を収録したのは、こうした記事を書いたことを事実として記録しておきたかったからであろう。また、ファシズム期があったからイタリアが先進工業国の仲間入りすることができた、と彼は考えているようである。この本の中にも、A. ジェームズ・グレゴールの『ファシズムのイデオロギー』を公平な本として紹介する文章を収録し、その中でプレッツォリーニは、「ファシズムは発展途上国から主要工業国へ、世界の強国へのイタリアの変貌の第一歩を示している」と述べている⁹⁶。

1940年4月6日に《オッジ》に寄稿した記事が収録されているが、プレッツォリーニは、この時期にイタリアの新聞に政治的な文章を寄稿することは稀だった、と解説している⁹⁷。イタリアの同盟国ドイツは前年9月から英仏と戦争状態にあったわけだが、この記事の中で彼は、アメリカ人の大多数が英国に親近感を持っていることを指摘、イタリアに自制を求めている。しかし、6月10日にイタリアは英仏に宣戦布告する。そして、翌1941年12月11日、日本軍の真珠湾攻撃に続いてアメリカにも宣戦布告、これ以降プレッツォリーニはイタリアから完全に切り離されてしまうことはすでに見た通りである。そういう事情もあって、この本には1940年代前半のものとしては、《オッジ》の記事を例外として、活字になった文章ではなく、彼の日記の抜粋が収録されている。その中で注意を引くのは、F.B.I.の取り調べを受けたことを記した、1943年4月12日と19日の部分である⁹⁸。ところが、プレッツォリーニが編纂して刊行した二巻本の日記にはこの部分はなく⁹⁹、前にも触れたように、4月18日の項にF.B.I.から召喚されたことが簡単に記されているだけである¹⁰⁰。

この違いをどう理解すべきなのか。この本に収録された4月12日の項には、亡命した大物（プレッツォリーニはF.B.I.から名前を聞き出すことはできなかったが、1947年から51年まで外相を務めたカルロ・スフォルツァと推測している）が潔白の証言をしてくれたこともあって、F.B.I.には彼を告訴する気はないらしいこと、ファシズムを誕生させるためにも終了させるためにも、一銭も出したこともないし、指一本動かしたこともないことが、記されている。また、4月19日の項には、取り調べの様子が具体的に記されている。

プレッツォリーニには、ファシストである、ファシズムの手先であるという評判が終生ついて回ったが、精神の自由と真実の追究を何よりも重視する知識人として、このような評判は到底看過できるものではなく、機会あるごとに証拠を挙げて打ち消しに努めてきた。今回もそういう意図があって日記のこの部分を収録した、と思われる。それでも、日記を刊行する際にはどうしてこの部分は収録されなかったのか、という疑問は残る。

96 Ibid. p.174. この文章の最後に [1974] とあるが、どこに掲載されたのかの記述はない。この本のために書き下ろしたということだろう。グレゴールの本は1969年に刊行されている。A. James Gregor, *The ideology of fascism*, Free Press (New York), 1969.

97 Giuseppe Prezolini, *Sul fascismo* (1915-1975) cit., p.117.

98 Ibid., pp.129-130.

99 彼の死後、第三巻が刊行された。Giuseppe Prezolini, *Diario 1968-1982* edizione curata da Giuliano Prezolini, Rusconi (Milano), 1999.

100 Giuseppe Prezolini, *Diario 1942-1968* cit., p.44.

ファシズム体制崩壊後、ファシズムについてのプレッツォリーニの見方に大きな変化があったとは考えにくい。この本の最後に、自著『イタリアの遺産』の一部が収録されている。彼の解説によると、1947年にコロンビア大学の姉妹校の女子大バーナード・カレッジで英語による講義を行う依頼を受け、その講義録から生まれたのがこの著書である¹⁰¹。第28章「未来派とファシズム」のかなりの部分がこの本に収録されていて、これを読むと、ファシズムについてのプレッツォリーニの見解がよくわかる。ここでも、プレッツォリーニは、クローチェが民主主義に対して辛辣な言葉や機知に富んだ皮肉を投げつけ、イタリアの若者はファシズムのはるか以前に選挙や代議士たちを嘲笑することを学んでいて、ファシズムは民主主義と戦うのにさしたる努力を必要としなかった、と説明している¹⁰²。このような物言いをクローチェが知れば、心外に感じたことだろう。クローチェはサルヴェーミニらのキャンペーンの影響もあって、プレッツォリーニがファシストになった、と信じ、晩年は彼を忌避していた。プレッツォリーニは終生クローチェを師と仰いで敬愛の念を持ち続けていた、と思われるが、やはりクローチェに対して含むところがあったのだろうか。

プレッツォリーニはまた、連合軍がイタリアに入ってくるまではファシズムは倒れなかったこと、ファシズムと戦った人の大部分は、ファシズム同様自由主義には反対の共産主義者たちだったことを記している¹⁰³。プレッツォリーニは彼の警句を集めた『イデアリオ』という本の中から抜き出した言葉をいくつかこの本に収録している¹⁰⁴。その中に、「ファシズムはイタリア国民のほとんど全員が自らの同意と称賛でもって育んだもので、もし今日もファシズムが続いていたら、彼らは称賛と支持を続けていたことだろう」という1962年の言葉がある¹⁰⁵。時流に逆らって人びとの神経を逆なでするようなことをあえて言うところがいかにもプレッツォリーニらしい。そして、『イタリアの遺産』から引いた文章でこの本を締めくくっている。そこで彼は、「ファシズムは資本主義と自由主義の危機を解決するために世界で発見されたさまざまな方法の一つで、それは歴史条件や国民性によって異なっていたが、ロシアでは共産主義、ドイツではナチズム、アメリカではニューディール、英国では帝国主義的社会主義、イタリアではファシズムであった」と結んでいる¹⁰⁶。

101 Giuseppe Prezzolini, *Sul fascismo (1915-1975)* cit., p.185. Giuseppe Prezzolini, *The legacy of Italy*, Vanni(New York), 1948. 後にイタリア語訳が刊行された。*L'Italia finisce: ecco quel che resta*(traduzione dall'inglese di Emma Detti), Vallecchi (Firenze), 1958. 再刊が1981年にRusconi (Milano) から出ている。

102 Giuseppe Prezzolini, *Sul fascismo (1913-1975)* cit., p.188.

103 Ibid., p.190.

104 Giuseppe Prezzolini, *Ideario*, Edizioni del Borghese (Milano), 1967

105 Giuseppe Prezzolini, *Sul Fascismo (1915-1975)* cit., p.158.

106 Ibid., p.191.

(むすび)

我われは、ファシズムとある人物の関係を考える場合、その人物がファシズムに賛成か反対か、あるいは最初は賛成だったが、後に反対に転じた、といった視点で見ってしまう。ところが、プレッツォリーニにはこの方法は通用しない。彼はファシズムから一歩身を引いて、それをよく観察し理解しようと努めることが、知識人としての自己の使命である、と考えていた。そこにプレッツォリーニの独自性がある。

(本学准教授＝イタリア語担当)